

---

# 1億を手にしたら

1月生まれだけど「如月」

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1億を手にしたら

### 【Nコード】

N0137P

### 【作者名】

1月生まれだけど「如月」

### 【あらすじ】

ある日俺は、1億円を当てた。 1億円を当てただけで人生は変わる。 所謂「お話」

## 1億と人間と欲望と(前書き)

初めて制作&投稿します  
よろしくお願ひします

## 1億と人間と欲望と

ある日俺は、1億円を当てた。 1億円を当てただけで人生は変わる。 そういってお話

俺は何処にでもいる高校生。 毎日友達と話し、勉強し、そして時々恋をするようなどこにでもいる高校生だった。 でも俺はある日、なんとなく「おもしろそうだから買つか〜」という軽い気持ちで買った宝くじが見事あたっていたのだ。 配当金額は1億円。 …

当時俺の家は決して裕福ではなかった。 父は土木関係の仕事で、母はギャンブラー、自分の小遣いはバイトで稼いでいた。 そんな俺には1億円なんて大金を見たこともなく、ましてや自分の物になるなど思いもしなかった。 しかしその見たことも触ったことも自分のものになるなど思っていなかった大金は今自分の口座に振り込まれている。 この口座には今までバイトで稼いできた給料が振り込まれている。 自分で持っているたった一つの口座だ。 そこには今1億と自分で稼いできたお金の金額が書き記されている。 俺は真つ先に両親に言おうと思った。 しかしその日のうちに言えなかった。 もしかすると今起きていることは夢で、次の日起きたら1億なんて数字はどこにもなくて、いつも給料分のお金しか振りこまれていない、そう思ったのだ。 しかし次の日もその次の日もその次の日も銀行で預金通帳の残高を確認すると1億という大金が残っているのだ。 そして俺は、両親にこのことを話した。 いや、本当はこの前にたった一人の親友に話してしまった。 それが俺の人生で最悪の不幸だった。

少し話が前後するが、1億円を当てた次の日から俺の家にはいる

んな勧誘が来た。家を建て直しませんかから始まり、保険の電話も何件もかかった。両親は俺が話すまでいつも頭を「？」にしていた。そして俺のはなしを聞いたとたんこうなった。

「あんた！なんでもつとはやく言わなかったの！！？」

「俺の力ネじゃん。俺が持つてるんだからいいだろうが」

「そうじゃないの！！ああもう…いいわとりあえずその1億は私があずかります。」

「はあ？なんて言った今？」「私が預かります」？ふざけるなそう思った俺は母にこう言った。

「嫌だね。なんで俺が当てた1億を母さんにやらなきゃならないんだよ」

「いつからアンタそんなにがめつくなつたの！！いいからその通帳貸しなさい」

「嫌だね。預かった1億を競馬でスろうとしてんだろ？そんなことわかりつきてるのになんで1億を預けなきゃならない？」

「アンタ…！！親に向かってそんな口きいていいと思ってるの！！？」

「なんだよ、こんなときだけ親ヅラすんなよ！いつもいつも競馬、競輪、競艇、パチンコ、e t c …やりすぎなんだよ！1億なんて大金あんたに持たせたら一瞬で泡じゃ！ハーン、俺は絶対にヤダね。あんたになんかこんな大金やれねえよ！！」

言った後に後悔した。母のギャンブル好きはどうにもならないが、母はそんなことをしな

がら家事はやっていたし、お金のやりくりもキッチンとしていた。ギャンブルに使うお金は

自分の小遣いから出していたが。

しかし、その後悔はすぐになくなった。そのきっかけは母のこの一言からだった。

「うるさいわね。あんたの持っているお金は私が使う権利があるわ！だって私がアンタをここまで育ててきたんですから！だから早く

その通帳を貸しなさい。今から下ろしてくるから。」

「ハア？なんで下ろす必要がある？俺の金で何する気だよ！！？またギャンブルだろ？だったら俺は貸さないね。……まあでも半分くらいはわたさないと。腐っても親だしな。」

「半分？まあそれでいいわ。そのかわりその通帳は私がかん」「させつかよ」「

「はあ？アンタ何言ってるの？じゃああなたが管理するの？」

「そうにきまつてんだろ。あんたに管理させると明日の内に残高0になってるだろうよ。俺の給料も入ってるのに管理させるわけないだろ」

「そうだ。俺の通帳にはバイト代の435,200円と1億が一緒に入っているのだ。これをわたすと今までせっせかせっせか働いてきたのが水の泡だ。」

「わかったわ、その代わり5千万入った通帳を明日つくって私に渡しなさい。いいわね？」

「それでいいよ。そのかわり俺の通帳には一切触らせねえからな」

続くのか？

## 1億と人間と欲望と（後書き）

これは知り合いが1億を手にしたので、そこから妄想力を働かせて書いたものです。いろいろと意味不明なことや「ここはそうじゃないだろう」「など思うかもしれませんが未長くお付き合いをお願いします。

## 5千万と友達 1 (前書き)

1億という大金を手にした主人公は親に半分の5千万をわたすことにする。

そしてこのことをただ一人打ち明けた親友のことを思い出す…



## 5千万と友達 1

ここで初めて弟が口を挟んできた

「しっかし兄ちゃん。そんな大金持っててどうすん？友達とか寄ってくるで？」

それを言われた瞬間自分の過ちに気付いた。親友にこのことを話しているのだ。これはヤバい。非常にヤバい。うちの学校はそこそこ都会の場所にある。うちの学区もそうだ。都会なら遊ぶ場所はいくらでもあるし、おごってもらおうと思えばいくらでも場所はあるのだ。今日は休日だから友達には会わないが、明日からは学校である。その友達からおそらく噂が広まってることであろう。

「そのことについてはどうにかするよ。んじゃあ俺は部屋に戻る。」  
「あ、じゃ俺も部屋もどろつと」と

弟は俺と同じ部屋だった。いろいろと苦労してきたがその苦労もこれで終わりだ。まずは5千万で家を新築にしようと考えている。その時に部屋は別々になるだろう。

「兄ちゃん。…えーつとその…」  
「あ？あゝ小遣いか…ちよつと待ってる。明日少しやるよ。その代わり友達にこのこと話したり、見せびらかしたらダメだからな。いいな？」

「うん！！わかった！」

弟はいつもこうだった。人の言うことを素直に受け止めるということかなんというか…

まあでもやりやすい弟ではあった。

さて、問題はここからだ。どうやって5千万という大金を守りながら使うか…。そこはたいして問題ではなかった。問題なのは、友達だ。俺はただ一人の親友にすべてを話してしまっている。そして、彼は結構ワルが多いグループの中の一員だった。悪なのでタバコも吸ってるし、酒もそこそこやるようだ。

「（やつべえな…あいつはいいとして、リーダーがうつといな。あいつのシケモクの銘柄高いやつだから金せびられるな。ちつくしよめ。）」

「兄ちゃん。声にでとるで。」

「ん？ああ、スマン。…しっかし、めんどくせえことになったな…」「え？まさか兄ちゃんこのこと誰かに言ってるん？」

「まあな。兄ちゃんの親友にちよつことな」

「あちゃ〜。兄ちゃんヤバいね。明日からカモられるかもね」

「うつせえ、そんなこと言っんなら小遣いやんねえぞ」

「ゴメンなさい」

「即答かい」笑「まあいいや。さてと、まずはこの預金通帳の隠し場所と隠す方法だな」

「兄ちゃんこの部屋に隠すん？」

「あ〜そうか、お前がいるな。」

「俺兄ちゃんの金なんて盗らないよ！！」

「疑っちゃういねえけど、もしものことがあって、お前をうたがいたくないんだよ」

「そっか〜。なら部屋の中はだめだね」

「まあそうゆうことだな」

問題はここからだ。1：隠し場所（弟にもばれない場所） 2：

隠す方法（出来るだけ簡単でかつ取り出し方法は簡単なものだ）

この二つは絶対条件だ。どっかのマンガみたいに引き出しの中にダミーの板を入れてその下にガソリンが燃える仕組みにして…というのも考えたが、それではもしもの時に全額パーになるのでそれはやめておいた。しかし、ダミーの敷き板を引く案はいい案だと思った。本当にいいのは引っ越して知り合いのいない、そう沖縄や北海道のようなところにすむということだ。そうなった場合、親は大切であり一番の味方だから一緒に連れていくという選択肢がでるだろう。しかし、あの親のことだ。きつと引っ越し先でもギャンブルに金をつぎ込み、仕事なんてしないだろう。そして、親父は親父で再就職の

際にそこその就職先をみつけてあのギャンブル好きの母親に尻に引かれていることだろう。そんなことにはさせない。絶対にだ。だから、引越しのことなどはおいおい考えるところとして今はコインロッカーなどに預けておこうというのが案だった。銀行の近くにコインロッカーがある。そこなら当分は大丈夫であろう。ずっと預けていると誰かにばれそうなので、隠し場所はいくつか考えておかなければならない。当面はいろんな場所のコインロッカーを転々とするということしか考えず、その日は親に5千万入った親名義の預金通帳をわたし、弟に1万小遣いをわたし、課題をやり寝た。

次の日、俺が学校にいくと。

「おい！聞いたぜ！？1億当てたんだって？頼むからさっす金少し貸してくんね？」

「おい、俺が先だぜ。なあいいだろう？」

「おい、どけ。」

「おい、リーダーのお通りだあ。てめえらはどいでなあ。キャハハ」  
「1億あてたんだってな。聞いたぞ。そこで話がある。俺たちのグループのなかでお前はぶっちゃけた話下っ端だ。だがしかし、この俺様に金を出すというなら話は別だ。お前を幹部にしてやっても……つておい。どこ行く？」

「あ？うつせえな、俺はあんたの舎弟になつたわけでも部下になつたわけでもねえよ。ゆえにあんたに金貸す義理はねえんだよ。大かた、俺を財布のひもにして自分のたばこ代からなんやらかんやらまて出させるつもりだろう？だったら俺はそんな話お断りつてわけだ。」

「貴様、誰に口をきいてんのかわかってんのか」

「ただのかっこつけたシケモクすつてる猿山の大将だろ？」

「貴様：おらあああああああ」

「だから、それがお山の大将だつていつてんじゃん」

俺はそういいながらリーダーのパンチを避けた。相手は頭に血が上っているのかパンチの筋は単調でただ力を込めたものだったので

避けることはたやすかった。

「もういいだろ？俺は誰にも貸す予定はないし、自分がぜいたくに使う予定もねえよ。第一にあんたはその下っ端に自分のパンチ避けられてんじゃん。だったらそんな奴の下に入るつもりはねえし、関係も持ちたくないね。」

と、俺はいい捨ててクラスから出て屋上を目指す。屋上に行くまでに何人の人間に声をかけられただろうか？その人間は全員無視をし、俺は屋上に向かった。そこには誰もいなかった。やっと一人の場所が見つけたと思ひ、俺はそこで昼寝をすることにした。しかし、至福のひと時はすぐに壊されることになる。誰かが屋上に来たのだ。その人物は…親友だった。

「ごめんな。俺がうつかり洩らしちまったかばっかりに…」

「ホントだよ。たくめんどくせえったらありやしねえ。リーダーには完璧に睨まれたな。こりゃ。おめえのせいだぞどうにかしやがれ」

「ええ！？そ、それはお前が啖呵切ったからじゃねえか」

「うつせえ。もとはと言えはおめえのせいだろうが。はくソだるいことになった。」

「どうすんだ？」

「しらね。まあ今は寝る。だからどっか行け。」

「はあ！？何か対策考えようぜ！？」

「いいよ。それも含めて寝るんだよ。お前は邪魔だからどっか行け」

「う…わかった。じゃあな。授業出るよ」

「……」

そういつて元親友は屋上を去った。

続くかもね



5千万と友達 2 (前書き)

今回はギャグ&バイオレンスです

でもバイオレンス描写はあまりないです

## 5 千万と友達 2

元親友は屋上を去った。残っているのは俺一人。

寂しい時間が過ぎる。いつも俺のそばには誰かいたからだ。

どうしてこうなった。誰のせいだ。何のせいだ。理由はわかってる。すべてあの金のせいだ。

なにもかも、親との仲も、友達との仲も…

こんなふうにする気はなかった。1億手に入れたってこんなことになると思わなかった。

だから俺は、その日。…  
久し振りに涙を流した。

俺は教室へ帰った。そこで待っていたのは…

リーダーとあのドラえもんと言うスネ夫だ。こいつらはこれからジャイアンとスネ夫にしよう。

ジャイアンは俺に開口一番

「おう、貴様さつきはよくも俺のことをスカしてくれやがったな。

喜べ、今からお前の解体ショーを始める。」

「そうだぞ！リーダーの言うことは絶対なんだぞ！」

脳内ではリーダー「ジャイアン」という方程式が組まれていた。

「どうでもいいけど俺パス。とりあえず教室入れろ」

俺はジャイアンとスネ夫がいつていることを無視し、教室に入ろうとした。すると、ジャイアンが

「ああ？貴様俺から逃げれると思ってるのか？ああ？」

「ハア？なんのこっちゃ。ええからはよどけ」

俺は面倒くさかったので、他の入り口から入った。すると、教室の雰囲気は変わっていた。

「……あいつ帰ってきたんだ。…」

「シッ！聞こえるよ！」

本当に面倒くさい。俺はそう思ったのだ。彼らは基本的にジャイアンの味方だ。というより無理やり味方側につけさせられている感じだから、彼らは俺のことを無視するように指示されたのだ、と俺は思う。

「（はあ…だるい…クソだるい…んだよこいつら。人のこと邪魔もみたいに見やがって。あゝ！くそ！）」

そう思いながら俺は自分の席に戻ろうとした。しかし、そこには一つの花瓶があった。

意味は「お前は死んだんだよ『学校くん』である。典型的なイジメである。そんなことは気にとめない俺であった。いちいち気にするのが面倒だったただけだが。

そう思いながら俺は、花瓶を後ろの棚に置き、自分の席に戻った。

「おい、ちよつと来い。話がある」

ジャイアンだ。ということは…

「リーダーの言う通りにしやがれ！」

ホントに仲がいいですこと。と思いつつも俺は断るのも面倒なのでジャイアンに付いていった。

場所は屋上。さっきまで俺が寝ていた場所だ。さっきと同じように誰もいない。

「お前と俺。今から1対1のサシを申し込む。異論は受け付けん」  
いやいや受け付けるよ。マジジャイアンか…

「見届け人はこいつでいいな」

「誰でもいいよ。スネ夫。お前のジャイアン今からぶつ倒すからそこんとこちゃんと見とけよ」

「ヘン！お前なんかリーダーが負けるわけないぜ。あと、俺のことをスネ夫って呼ぶな！！」

「俺もジャイアンと言われたな。…」

なーんか黒いオーラまっつてますよ。おいジャイアンさん？冗談ですって、冗談（笑）



「……………」ゴゴゴゴゴゴ  
やばいよ…なんかゴゴゴゴとか言ってるよ。ダメだこれは。俺も久々にマジで行くか。

そう思った時、相手は何も言わずに殴りかかってきた。結果から言ってこの奇襲は成功しなかった。俺はそれに気づいていたからだ。そこからパンチとキックの応酬だった。こちらも負けじとパンチとキックを繰り返すが、伊達にリーダーを名乗っているだけはある。体格はあちらのほうがでかく、一回一回攻撃の重みが全然違う。おそらく体重移動の仕方だと思う。だったらこちらにも手はある。みぞおちと耳膝、そして目を狙うことだ。

相手もこのことに気づいたのだろう。やみくもに殴るだけではなく、こちらの考えを先読みするようにパンチを繰り返してきたのだ。それでもこちらの手札はみぞおちと耳、膝、目、だけだ。やはりそこを狙うしかない。

結果としては俺は解体されなかった。実際あつちのほうが体格が良かったとしても、ただやみくもに殴る蹴だけだったので勝つことはたやすかった。やっぱり単細胞か…

まあそんなことはどうでもいいとして。問題はこっからだ。バイオレンス展開で忘れていたが、今俺は5千万という大金を持っている高校生なのだ。クラスメイトには啖呵切ってるわけだし、親友とはもう疎遠だろう…とりあえず、金庫を買うことにした。

続くといいな

5千万と友達 2 (後書き)

続いてほしいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0137p/>

---

1億を手にしたら

2010年12月25日18時11分発行